

論 文 要 旨

氏 名	前田 隆洋
タイトル (日英併記)	<p>Can the lower rate of CT- or MRI-related adverse drug reactions to contrast media due to stricter limitations on patients undergoing contrast-enhanced CT or MRI? (当院における CT 検査及び MRI 検査の造影剤副作用発症率の低さは厳格な施行基準によるものであるか?)</p>
<p>論文の要旨 (日本語で記載)</p> <p>様々な歯科関連疾患に対する画像診断に際し、造影 CT 検査や造影 MRI 検査が頻用されている。造影剤の使用は副作用を惹起する危険性を伴う。造影剤による副作用の発症に関しては大規模な他施設共同研究が行われてきた。しかしながら、歯科大学病院における施行例はほぼ全てが口腔・顎・顔面領域の悪性腫瘍の精査、あるいは悪性腫瘍が疑われた症例及びその経過観察である。そのため、これまでの報告には当てはまらない可能性がある。そこで副作用発症率及び全身状態のデータを分析し、副作用発症のリスクファクターの分析及び安全な施行基準を再検討することを目的として解析を行った。</p> <p>今回の研究では 18 年にわたり歯科大学病院で行われた造影 CT 検査 (延 5576 例) 及び造影 MRI 検査 (延 3357 例) に関してレトロスペクティブな分析を行った (九州歯科大学研究倫理委員会承認番号: 16-15)。検討項目は造影剤副作用発症率、副作用の症状、既往歴や造影検査施行前の血液検査結果とし、これまでの報告との比較、初回の施行と経過観察 (2 回目以降の施行) との比較、副作用発症例とコントロール群との比較を行った。</p> <p>当院の造影 CT 検査による副作用発症率はこれまでの日本からの研究報告より低く、世界で最も発症率が低い報告と比べて同程度の水準であった。初回施行時と経過観察との比較において、副作用の発症率に有意差は認められなかった。副作用発症群とコントロール群の比較によりリスク因子を検索したところ、副作用発症群では肝機能障害を有する割合が有意に高かった。造影 MRI 検査については日本及び世界からの報告と比べて低かった。初回施行時と経過観察との比較において、副作用の発症率に有意差は認められなかった。副作用発症群とコントロール群の比較によりリスク因子を検索したところ、副作用発症群では消化管障害を有する割合が有意に高かった。</p> <p>我々の施設における造影剤副作用発症率は世界の中でも最も低い水準であった。このことから、我々の造影検査の施行基準は適切に機能していると考えられる。我々の報告と他の報告との大きな違いの一つは、単独の歯科病院での検討であるため、画一的な基準で施行されたデータであるという点である。次に、口腔・顎・顔面領域以外の病気の有無であり、我々の報告では全身状態が良好な場合のデータを反映していると考えられる。本研究の結果は副作用率、症状の種類など、過去の報告と共通点も多く、適切に検討されているものと考えられる。その中で、我々の結果から造影 CT 検査における肝機能の血液検査結果及び造影 MRI 検査における消化管障害が有意な因子として挙げられた。肝機能に関する血液検査データについては我々の施行基準でも緩い可能性があり、再考の余地が存在する可能性がある。今回の研究は我々の病院単独でのデータであるため、造影剤の施行基準及び手技が画一的である一方、年齢層及び対象疾患が限られていた。我々の研究結果は比較的高齢、口腔癌患者で、比較的全身状態が良い患者層での特徴を反映しているものと考えられる。</p>	